

〔国語科教育実習報告〕

教育はブラック？

国語科教職担当 熊谷 芳郎

「働き方改革」という言葉があちこちで耳に入ります。その中で、教師が働きすぎだという問題がマスコミで大きく取り上げられました。その解決策として、部活動を中心に、教員の労働時間を見直す動きが広がっています。

しかし、教育実習に行った皆さんは、大学に戻ったときに大きな喪失感を味わっていました。授業の中で、実習の報告をしてもらいましたが、どこまで話しても終わりというものが見えず、やむなく途中で打ち切ってもらうことになりました。実習後に道で生徒とすれ違ったときに「先生、おはようございます」と言われたと感激して語ってくれた人もいました。

労働環境という観点からはブラックでも、そこで触れた生徒との交流は、大きな喜びの記憶となっていることを感じます。人と人が触れ合いをとおして感じとるものは、物理的な時間や賃金という問題とは別の次元にあることを、実習体験を聞きながら毎年感じます。

今年度、そんな体験をしたのは、次の皆さんです。

学籍番号	氏名	教育実習校
115J018	大原 萌恵	新座市立第三中学校
115J019	金井 健	飯能市立飯能第一中学校
115J034	柴田 武	春日部市立緑中学校
115J038	瀬井 早苗	さいたま市立岸中学校
115J044	栃木 恭太郎	八潮市立八潮中学校
115J061	吉岡 美紅	深谷市立深谷中学校

ここには、6人の中から、大原さんの実習体験をご報告します。大原さんは、母校での教育実習を通じて、生徒との人間関係の大切さを学んできました。生徒とのほんの小さな出来事が彼女の大きな支えとなった実習でした。

このような人と人との触れ合い体験は、何より周囲の支えがあって初めてもたらされたものです。実習校の先生方、生徒の皆さんに心からの感謝をいたします。そして、このうれしい体験が教育の核として、いかなる「働き方改革」を経ても次の世代に受け継がれていくことを願っています。